闇に消えた怪人

グリコ・森永事件の真相

一橋文哉
Ichihashi Humiya

新潮社

闇に消えた怪人

グリコ・森永事件の真相

一橋文哉
Ichihashi Humiya

新潮社

闇に消えた怪人——グリコ・森永事件の真相

1996年7月30日発行
1996年11月30日12刷
【著　者】 一橋文哉
【発行者】 佐藤隆信
【発行所】 株式会社新潮社
郵便番号162　東京都新宿区矢来町71　振替00140-5-808
【電話】 編集部03-3266-5411　読者係03-3266-5111
【印刷所】 錦明印刷株式会社
【製本所】 大口製本印刷株式会社

©Fumiya Ichihashi 1996, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-412801-5　C0095
価格はカバーに表示してあります。

闇に消えた怪人――グリコ・森永事件の真相▼目次

プロローグ　追跡　7
第一章　敗北　18
第二章　原点　42
第三章　怨念　65
第四章　嘲笑　95
第五章　疑惑　122

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六章　報復　147
第七章　否認　177
第八章　禁忌　206
第九章　正体　236
エピローグ　手紙　259
関連年表　267
あとがき　271
注（資料）　274

表紙写真　共同通信
装幀　新潮社装幀室

闇に消えた怪人――グリコ・森永事件の真相

プロローグ　追跡

飛行機は旋回しながら徐々に降下し始めた。分厚い雲海に突っ込む。その切れ目からほんの一瞬、純白に染まった町が見えた。機はやがて、白一色のキャンバスに、まるで墨で一の字を書いたような空港に着陸した。その町は、深い雪に埋もれていた。

空港ビルから外に出ると、冬の北陸はさすがに、凍てつくような寒さだった。タクシーに飛び乗り、〝目的地〟に急ぐ。雪道がコチコチに凍っているため、慣れているはずの運転手でさえ、カーブする時は車の後輪がかなりぶれる。

車の揺れにようやく馴れたころ、前方に〝目的地〟が見えてきた。その上空には、暗雲が広がり始めていた。車を降りるころには、雲の裂け目からついに氷雨（ひさめ）が落ち出し、やがて容赦なく、横殴りに吹きつけてきた……。

平成六年二月、私はただ一人、北陸の小さな港町を訪れた。

「かい人21面相」ではないか――と、警察当局がマークしている人物が、その町にいるとの情報を得たからであった。

〝目的地〞は町外れの病院であった。男は内臓疾患のため、そこに入院していた。
病院は外来患者の受付フロア以外、閑散としていた。
病室に入ろうとして躊躇した。ベッドに横たわった男の顔には無数のシワが深々と刻み込まれ、とても六十五歳には見えないほどやつれ果てていたからだ。
「私に何か御用かな」
眠っていたと思った男が、急に声をかけてきた。意外に重厚な声と鋭い眼光が、突如として、狭い病室に異常なほどの緊張感の高まりを生み出した。
〈ついに「21面相」を突き止めた――〉
待ちに待った瞬間を迎え、思わず興奮し、武者震いした。
「グリコ・森永事件の件でお聞きしたいことがあって、参りました」
私は自分を落ち着かせるためにも、意識的にゆったりとした口調で声をかけた。
「ウウッ……」
男は一瞬、息を止めた。そして、私の顔を睨みつけると、そのまま押し黙った。
二人の周りを重苦しい沈黙が支配した。
数分後、気を取り直して取材を始めようとすると、男はゆっくりと体を起こした。そして人目を気にしたのか、小さな声で、病棟の外れにある見舞い客用の応接セットへ行くように促した。
私は小走りにそこへ行き、ソファの横に立ったままで待った。男が来るまでわずか二、三分のことだったが、とても長く感じられた。
〈ここにたどり着くまでの長い道のりを思えば、ほんの一瞬のことなのに……〉
いきり立っている自分がおかしくて、思わず苦笑いした。
男は薄汚れたパジャマ姿のまま、初老の女性に左半身を抱えられながら、一歩ずつ踏み締める

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ようにして歩いてきた。
ソファに座るなり、付添いの女性を指してボソッと一言、
「妻だ」
と言った。そして、それっきりまた、黙り込んでしまった。
質問を始める。男はじっと、空中の一点を見つめたまま、それを聞いていた。
時々、深いため息を漏らし、腕を組んでは目を閉じる。斜め横の席に座った「妻」は終始うつむいていた。チラッチラッと二人を交互に盗み見してはまた、下を向いた。
「あなたは、グリコ・森永事件のことをよくご存じなのではありませんか」
私はすべてを振り払うように、精一杯の気迫を込めて男に回答を迫った……。

警察庁指定広域重要一一四号「グリコ・森永事件」――。昭和五十九年三月十八日の江崎勝久・江崎グリコ社長誘拐事件に端を発した、その食品会社連続脅迫事件を、二十歳以上の日本人でおそらく知らない者はいないだろう。
全国のスーパーに青酸ソーダ入りの菓子をばらまき、大手食品六社に多額の現金などを要求。同時に、警察やマスコミに次々と挑戦状を送り付け、社会全体にその犯行手口を誇示した前代未聞の〝劇場犯罪〟として、わが国の犯罪史を塗り替えた大事件である。
私は、事件記者の一人として、この事件を発生当初から現在に至るまで十年余、追い続けてきた。
専従捜査員たちに連日、夜討ち朝駆けをしたり、被害企業の社員や事件現場周辺の住民らを一人ひとり聞き込み取材した。さらに、捜査線上に浮かんだ容疑者たちの身元を割り出し、次々とインタビューを試みるなど、まさに事件の真っ只中にいたのである。

「かい人21面相」の動きが止まり、事件が〝小休止〟した後も、個人的に追跡し続けた。休日を利用して、何度も各事件現場に出掛け、犯人グループが残した手掛かりを探った。江崎家のルーツと21面相の接点を求めて、江崎一族の出身地である佐賀県や、菩提寺のある高野山なども訪ねた。容疑者や事件関係者などに会うために、全国各地を歩き回った。

取材相手は延べ一千人以上に上り、その一人ひとりの顔は今でも、しっかり脳裏に焼きついている。事件の原点を探る旅路はおそらく、十万キロを下ることはあるまい。

そうして集めた証言メモや資料のファイルは、段ボール十箱余りにもなった。そこには、警察当局の極秘捜査資料も多数含まれている。

それらを読み直していくうちに、非常に多くの重要な事実が、ほとんど眠ったままになっていることに気づいた。

その数多い捜査資料の中でも、私が忘れられないものがある。

「B作戦」――と記された分厚い綴りがそれだ。捜査本部が平成四年、最後のチャンスとばかりに、総力を挙げて作り上げた〝超一級資料〟である。

何しろ、そこには〝キツネ目の男〟や〝ビデオの男〟をはじめ、一味のリーダーや、脅迫テープに登場する女性と男児ら犯人グループの実名がズラリと書いてあるのだ。

しかも、年齢や現住所はもちろん、出身地とか経歴、家族構成、職業……といったパーソナル・データが詳細に記載されている。

さらに、お互いの繋がりやそれぞれの背後関係がさまざまな視点から綴られ、江崎グリコをはじめとする被害企業や各事件現場、犯人の遺留品との接点など、彼らを容疑者として挙げた根拠が明示されている。

また、それらが分かりやすいように、相関関係を示すチャート図まで付いている。

実は、冒頭に紹介した「北陸の男」は、その中で〝サブリーダー〟的な存在として登場してくる一人なのだ。

そんな資料を作れるぐらいなら、警察はなぜ、犯人を逮捕しないのか――。その疑問に答え、グリコ・森永事件の深層に迫ることこそが、本書の狙いである。

ただ、残念ながら、私はここで、その資料をすべて紹介することはできない。

なぜなら、グリコ・森永事件は未だ、解決しておらず、資料に登場する人々は決して犯人と断定されたわけではないからである。

しかも、犯人が現場に姿を現した数少ない事件として、捜査本部が特に重視していた江崎社長誘拐事件が平成六年三月、大阪府寝屋川市でアベックを襲った強盗致傷事件が同年六月、それぞれ時効成立してしまった。

後は、青酸入り菓子ばらまき事件の時効だけが、ちょうど二十世紀最後の年である二〇〇〇年二月まで残っているものの、その事件は決め手となる証拠がほとんどないため、捜査は事実上、終結していると言っていいのである。

だが、私は本書で、その資料の中身はもちろん、周囲の事情や背景などをでき得る限り詳しく、かつ分かりやすく明らかにしたい。

私自身が十年余にわたり追い続けてきたグリコ・森永事件に、一つの〝けじめ〟をつけたかったこともあるが、何よりも、この事件の本当の姿を少しでも多くの人に知っていただきたかったからである。

社会評論家の赤塚行雄氏はこの事件を〝劇場犯罪〟と呼んだが、私はその未だに台本さえできていない「最終幕」を描くつもりなのだ。

まず最初に、その捜査資料や取材メモなどを基に、「北陸の男」について説明しよう。
なお、文中に登場する人物の年齢や肩書は、すべて事件当時のものである。

「北陸の男」が捜査線上に浮かんだ理由は、実は三つある。
第一は、グリコ・森永事件そのものではなく、その六年前の昭和五十三年に、江崎グリコ役員宅に送り付けられた脅迫テープであった。
捜査員が『五十三年テープ』と呼んでいるテープは〝初老の男〟が、
「過激派がグリコから三億円を脅し取ろうとしている。私が彼らに交渉して、一億七千五百万円にまけさせるので、応じてほしい」
などと要求してきたものだ。
犯人はその中で、過激派の手口として江崎勝久社長（当時は副社長）の誘拐、本社への放火、青酸入り菓子のばらまきなど、後のグリコ・森永事件を彷彿とさせる内容を示唆していたことから、捜査本部は後に、同一犯の仕業と断定している。
その〝初老の男〟の声が「北陸の男」に酷似していることが、捜査本部の声紋鑑定の結果、分かったのである（以下、本書で「声が似ている」とか「酷似している」という表現は、原則として、声紋鑑定の結果を指すこととする）。
しかも、テープの背景音として、滋賀県内を走る私鉄の近江鉄道の電車走行音が交じっていることが判明したが、「北陸の男」は当時、近江鉄道沿線の同県大津市郊外に住んでいたのだ。
次に、事件当時に「北陸の男」と同居し、その後京都市内に転居した娘に焦点が当てられた。
この「京都の娘」は、一連の事件のうち五十九年六月の丸大食品恐喝未遂事件などで、犯人側が現金の受け渡し場所を指示したテープの中に出てくる〝若い女性〟の声によく似ていた。

また、娘の京都市内の転居先は、「かい人21面相」が挑戦状をコピーするなど犯行の準備を進め、捜査本部がその居住地ではないかと重視していた地域そのものであった。

しかし、何よりも捜査本部が注目したのは、二人が〝父娘（おやこ）〟だったことである。

犯人グループについて、捜査本部は女性や男児まで登場する犯行形態や、その〝犯行終結宣言〟後、十年余りも仲間割れしていないという結束の固さから見て、家族的な繋がりがあると見ていたからだ。

度重なる浮上で、捜査本部は二人の身辺捜査を徹底的に行ったが、これといった感触は得られなかった。二人は灰色のまま「容疑者リスト」に残された。

ところが、この〝父娘〟はもう一度、捜査線上に姿を現す。

五十九年十一月のハウス事件で、滋賀県警のパトカーに追われた犯人は、車を乗り捨てて逃走した。その車内は遺留品が多く、犯人のあわてぶりから見て、「かい人21面相」の身元を示す証拠が見つかるのでは、と捜査陣の期待を集めた。ある捜査幹部などは「ついに〝宝の山〟を掘り当てたで」と大喜びしていたほどである。

そこから採取された重要証拠の一つに、ＥＬ（エレクトロ・ルミネッセンス）と呼ばれる電子部品の削りカスがある。捜査が進むにつれ、その一ミリ足らずの微物が、大津市にある大手電子部品メーカーの工場でしか廃棄処分されていない特殊なモノと判明した。つまり、少なくとも犯人グループは、その工場に出入りしたことがある、ということだ。

捜査員たちは同工場の従業員とその家族はもとより、工場に出入りする人間、例えば下請け業者や各種機械のメーカー、メンテナンス関係者から近くの食堂の出前持ちに至るまで徹底的に身辺捜査した。その中の一班が、そこに出入りする産業廃棄物回収・処理業者など約七十業者を調べていくうちに、何と、父娘の存在が浮かび上がってきたのだ。

「北陸の男」は当時、ＥＬの削りカス回収・処理業者ら同工場関係者と親しく付き合っていた。「京都の娘」も同工場の従業員と交際していたことがあり、その従業員がかつて使用していた車に今も乗っている――との情報を得たのである。

「これは当たりやでえ！」

捜査本部は沸き立った。

しかし、平成四年春に、「京都の娘」から事情聴取したものの、捜査はそれ以上は進展しなかった。どんなに待っても朗報は届かず、ついにその捜査は終了してしまったのである。

〈なぜだ？〉

いくら質しても、親しい捜査員たちは、誰も理由を語ろうとしなかった。皆、

「いろいろ事情があってな……」

と口を濁し、苦渋の表情を浮かべるばかりであった。

〈これほど多くの共通点が揃う〝偶然〟なんて、そうザラにあるはずがない〉

そう確信した私は、何とかその男の素性と所在を割り出し、自分自身の手で疑問を解消しようと、二年後の冬、北陸の地を訪れたのである。

見舞い客用の応接セット周辺には窓がなく、病院の外の様子は分からない。が、雪がしんしんと降っているのだろうか、とても静かである。見舞いに訪れる人や、病室から出歩く患者はほとんどおらず、取材には好都合であった。

私は最初、どうやって答えを引き出すか迷っていた。これまで容疑者と言われた人たちに取材した経験から言って、いきなり、グリコ・森永事件との関係を聞いたら、警戒されて何も言わなくなる可能性が高い。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com